武蔵野日曜集会

アブラハムとイエス
――ヨハネ第８章31～59節――

１９８４年７月15日（武蔵野）
小池辰雄

多くの人の父　常に私の言葉の中に生きているならば　真理と自由　御霊と自由　罪の奴隷
神より出づる者　福音に生きていれば死んでも死なない　アブラハムの生まれいでぬ前より
十字架と復活は離すことができない　初めの愛　信仰ではなく現実だ

【ヨハネ８・31～59】

31 爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に
居らば、真にわが弟子なり。32 また真理を知らん、而して真理は汝らに自由
を得さすべし』33 かれら答う『われらはアブラハムの裔にして未だ人の奴隷
となりし事なし。如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』34 イエス
答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。
35 奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。36 この故に子もし汝
らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。我は汝らがアブラハムの裔な
るを知る、されど我が言なんじらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。
37 我はわが父の許にて見しことを語り、汝らは又なんじらの父より聞きしこ
と行う』38 かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』39 イエス言い
給う『もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。40 然るに汝ら
は今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。アブラ
ハムは斯ることを為さざりき。41 汝らは汝らの父の業を為すなり』かれら言
う『われら淫行によりて生まれず、我らの父はただ一人、即ち神なり』42 イ
エス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出で
て来ればなり、我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、43 何故わが
語ることを悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。44 汝らは己が父、
悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、
また真その中になき故に真に立たず、彼は虚偽をかたる毎に己より語る、そ
れは虚偽者にして虚偽の父なればなり。45 然るに我は真を告ぐるによりて、
汝ら我を信ぜず、46 汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。われ真を告
ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。47 神より出づる者は神の言をきく、汝らの聴

かぬは神より出でぬに因る』48 ユダヤ人こたえて言う『なんじはサマリヤ人にて悪鬼に憑かれたる者なりと、我らが云えるは宜ならずや』49 イエス答え給う『われは悪鬼に憑かれず、反って我が父を敬う、なんじらは我を軽んず。50 我はおのれの栄光を求めず、之を求め、かつ審判し給う者あり、51 誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』52 ユダヤ人いう『今ぞ、なんじが悪鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、然るに汝は「人もし我が言を守らば、永遠に死を味わざるべし」と云う。53 汝われらの父アブラハムよりも大なるか、彼は死に、預言者たちも死にたり。汝はおのれを誰とするか』54 イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。我に栄光を帰する者は我が父なり、即ち汝らが己の神と称うる者なり。55 然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽者たるべし。然れど我は彼を知り、且その御言を守る。56 汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』57 ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』58 イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前より我は在るなり』59 爰に彼ら石をとりてイエスに擲たんと為たるに、イエス隠れて宮を出で給えり。

●多くの人の父

藤井武先生の雑誌は『旧約と新約』という題でした。要するに、聖書ということ。122号で終りになった。「旧約と新約」ということをもし人間の名前で言うとしたら、「モーセとイエス」ということになる。「アブラハムとイエス」というのはそれとちょっと違う。モーセは律法の権化ですから。「律法」「トーラー」といえば旧約のこと。旧約聖書のことをキリストは「律法と預言者」と言われました。旧約聖書は「預言書」と言わないで、「預言者」と言う。ユダヤ人の言い方では旧約聖書を「律法、預言者および諸書」「トーラー・ネビーム・ウー　ケスビーム」という。「ケスビーム」というのは「諸々の書かれたるもの」という意味で、「諸書」という。それを略して、「律法と預言者」。もっと簡単にいうと「律法」という。何といっても基礎は律法ですから。預言者は律法の根本精神をイエスの前につかまえた連中です。霊的な伝統からいうと、預言者からキリストです。もちろん、祭司という大事な面もありますが、キリストは大祭司と言われるから、言葉の一番深い意味では、預言者及び祭司を総合した、そしてまたそれを乗り越えたのがキリストです。

今日の題は、しかし、アブラハムなんです。「アブラハムとイエス」という。ちょうどヨハネ伝８章の今日やるところは正にこれが一番いい題だと思ってつけた。「アーブ・ラーハーム」というのは「多くの人の父」という意味です。「アーブ」というのは「父」、「ラー　ハー

ム」というのは「多くの人」。別な意味でいうと、イエスがまた「すべての人の父」と言われてもいいくらいです。キリストは神さまのことを「父」と言われたから、「多くの人の父」というのは神さまでもあるし、またある意味においてはキリストでもあるし、またアブラハムでもある。だから、「アブラハムとイエス」というのは同じ類の、同類なんです。

旧約で一番信仰の元祖となるのがアブラハムです。それを今度は、新約で信仰の基（もと）であるのはイエスです。だから、マタイ伝1章1節に、一番先に「アブラハムの子」と書いてあるでしょ。

「ダビデの子、イエス・キリストの系譜」

と。「アブラハムの子」というのは、アブラハムの信仰を継いだ者ということ。「ダビデの子」というのはメシヤ、王者。ただし、ダビデはこの世の王者だったけれども、キリストは霊界の王者です。「子」というのは「裔（すえ）」という意味だからね。ヘブライ語では「ベン」という字です。ベンジャミン・フランクリンの「ベン」というのがそうです。「ベンジャミン」なんていうのは正にヘブライの名前です。

●常に私の言葉の中に生きているならば

31 **爰にイエス己を信じたるユダヤ人に言いたもう『汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり。**

「信じたるユダヤ人」というが、一応信じた、まだ観念的な信仰ですよ。

「お前たちがもし常に私の言葉に居るならば、私の言葉の中に生きているならば」

と。「居る」という言葉は非常に大事な言葉です。「信ずる」よりも大事な言葉です。その中に留まっている、宿るという字です。いつも言っているように、常住する、内住している。内住、内在です。日本語で「お宿」というのは大事なんだ。

「私の言葉をお宿としている者は」

ということ。言葉の意味が分かったなんて、そんなことではない。言葉の中に生きているということ。もうそういうことから、本当に今までの普通の信仰はズレているんです。

「この意味はどうだ。聖書の研究、ヘブライ語、ギリシア語だ」

なんてやっている。何も私は、ヘブライ語やギリシア語を勉強するなと言っているのではない。言葉そのものを外側から、その意味を問題にしている。「意味」ではないよ、

「わが言は霊なり、生命なり」

という、

「その言の中に生きろ」

ということです。私は聖霊を受けてから、無教会に反旗を翻した。ただ聖書の研究ではないんだと。内村先生が『聖書之研究』なんていう雑誌を出していたから、あれは躓きの言葉なんだ、「聖書の研究」なんてのは。研究は正しい意味においてはもちろん善いことなん

ですよ。ところが、正しい意味ではないんだ、普通の研究というのは。躓きの言葉だ。躓きの言葉に躓かなければ一番いい。福音そのものが躓きなんだからね。

藤井先生はいわゆる研究者ではなかった。本当に聖書を、今の私の言葉でいうと、体（からだ）で読んでいた方です。決して頭ではなかった。ただ、先生においては、聖霊の世界がもうひとつ、ということだった。確かにそれは、残念ながら。だから、旧約的な義が強かった。もちろん、先生は素晴らしい信仰をお持ちでした。けれども、惜しいね、あれだけの資質を持っていながら。どうしてかというと、結局、聖霊の問題なんです。誰も藤井先生の悪口は言わない。私も悪口を言っているのではない。残念ながらまだ、もうひとつ（足りない）ということ。

「内村鑑三の屍（しかばね）を乗り越えて行く」

と藤井先生は言われた。私は藤井先生の屍を乗り越えて行く。

あなた方も私の屍を乗り越えて行ってもらいたい。前進また前進。それが本当のバトンタッチだ。けれども、私は死んでも、いわゆる屍ではないよ、天界でも前進しているから。もう何としてもこの戦いは進めていく。誰が何と言おうと。私はけなされたり、いろんなことを言われれば言われるほど逆に力がくるから。ありがたいね、本当に聖霊は。絶対にへこたれない。力（りき）んで言っているのでも何でもない。無だから。あなた方は是非ともその霊統を継いでいただきたい。

「もし、常に私の言葉の中に生きているならば」

という。だから、聖書の言は――黙示録に出てくるでしょ。

「表も裏も文字に満ちているこの巻物を食べろ」

という――正に食べろということ。凄い幻を受けるね、あれは。

「食べたら口に甘かったけれども腹には苦かった」

なんて書いてある。

もう本当に世は末ですね。それははっきりしている。アンチ・キリストの世界だ。だから、我々は原爆が破裂しようが、肉体がすっ飛ぼうが、どっこいという本当の霊体を持って生きていないとね。キリストの中に本当に宿っていないと。烈々たる信仰を持ってくださいよ。いい加減なことではないですよ。いい加減だったら、やめてもらいたい。

「汝等もし常に我が言に居らば、真にわが弟子なり」

と。キリストの弟子というのはレッテルではない。言葉の中に――いや、言葉ばっかりではない。キリストの行為もひとつの言葉だ。手足の言葉が行為なんだ――キリストの言行の中に生きろと。もう、福音書は本当にきちがいのようになって読みなさいよ。そして、本当にキリストのドラマの中に入っていかないと。私たちはキリストの直弟子ですよ。キリスト直結。「もし」なんてキリストが言われたが、「もし」ではない。

「お前たちは常に私の言の中に帰入してくるから、私の弟子だよ」

と、あなた方は読まなくては。我々に向かってキリストは語っていらっしゃる。ユダヤ人

よりかもっとはっきりした奥のところを読まなくては。「それでもダメです」なんて言う必要はひとつもない。ダメだから入って行くんじゃないですか。

「ダメでなくなったら入って行きます」

なんて、そんなのではないよ。ダメだから入っていく、我々は。

●真理と自由

32 また真理を知らん、

と。「真理を知る」というような言い方をするものだから、すぐ観念的に「真理」という言葉をつかまえるけれども。キリストの言行は成るんです。成らないものは真理ではない。実現する。実言実行なんだ。これが真理なんだ。ヘブライ語の「アーメン」です、「エメツ」（真理）というのは。

「然かあれ。然かあり。そのようであれかし」

という、「正に然り」ということ。

「アーメンなるもの」

というのは、「実現するもの」ということです。だから、「誠（まこと）」という言葉が一番当たるかもしれないね、「言篇に成る」という字です。「誠を知らん」と。「真理」という言葉がちょっと違うから困るけれども。

言葉というのは困るんだよ。その人がどういう気持で使っていたかということを尋ねないとね。言葉そのものをただ抽象してしまったら、それはもう哲学史だってみんな分からなくなってしまう。どういう環境のもとに、どういう情況のもとにヘーゲルはこの言葉を使ったかということをつかまえないと、ヘーゲル哲学は分からない。カントだって、プラトンだって、みんなそうだ。同じ言葉を使いながら、内容が違ってくるから。だから、歴史的認識というのは非常に大事なことです。何でもそうですよ。ものごとは歴史的に認識していかないと。哲学史、文学史、医学史、何でも歴史を、変遷をみていかないとね。芸術史、音楽史、みんなそうです。

「真理を知らん」というのは、

「真理がつかめるぞ」

ということ。「つかむ」という言葉が一番いいかも知れない。ヘブライ的な「知る」はみんなそうです。全存在でそれをつかむことを「知る」という。頭で解ることではない。だから、そういう普通の観念的な概念で読むから、聖書はいつまでたったって分からないわけだ。ご苦労さんなはなしだ。

皆さんはもう、大事なことを集会で聴いているんですからね。「そうですか」ではないよ。「そうだ」と言って、つかまえて行ってください。それがつかまえられていくうちに、もう知らない間に聖霊の世界ですから。

而して真理は汝らに自由を得さすべし』

珍しいですよ、このキリストの言は。ここで「自由」という言葉が出てくるのは。これは「自由を得さすべし」ではなくて、「自由とする」という動詞です。

33かれら答う『われらはアブラハムの裔（すえ）にして未だ人の奴隷となりし事なし。

アブラハムの裔だから、奴隷となったことがないと。

如何なれば「なんじら自由を得べし」と言うか』

もう、自由の概念が全然、次元が違うものだから、こういう質問をしている。

34イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。35奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。36この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、されど我が言なんじらの衷（うち）に留らぬ故に、我を殺さんと謀（はか）る。

この質問の方は、社会的な意味における概念で言っている。キリストの方は、この「自由」は、社会的な概念の言葉を完全に霊的な内容の言葉に変えてしまっているわけです。次元が違う。社会的な自主自由、奴隷ということではない。ところが、キリストは今度は、「奴隷」ということを、罪に捕らわれていることを奴隷と言った。ルターは、キリストに捕らわれていることを奴隷と言った。

「そのキリストに捕らわれる奴隷が本当の自由だ」

とルターが『クリスチャンの自由』で言っている。

●御霊と自由

自由のことで、キリストのこの概念からものを言っているのがパウロです。コリント後書3章17節に、

「17**主は即ち御霊なり、主の御霊のある所には自由あり**」（コリント後3・17）

と。キリストは聖霊の方である。聖霊のあるところに、キリストの霊のあるところには自由がある。それだけが本当の自由だという。

律法に囚らわれていたら、これは律法の奴隷なんです。ユダヤ人は律法の奴隷になって一生懸命で外側からこれを守ろうとしている。ところが、その律法を外側から守っていた最大の奴隷はパウロだった。

「律法の義につきては我は責むべきところなし」

なんて言って、律法を大いに拳々服膺していたわけだ。パリサイ人がみんなそうなんだ。一生懸命で守っている。それは実は囚われている。ちっとも自由ではない。

ところが、囚われないで、律法の根本精神をつかんで神さまと直結しているキリストが本当に律法を満たした。律法を破って律法を満たすんです。律法を破りながら律法を満たしているような、そういったキリストが本当の自由です。そんな自由は、ユダヤ教の人た

ちには分からないんだ。ユダヤ人は、「キリストを信じた」なんて言っても、本当はちっとも信じてはいない。「信ずる」というのは「受けとる」ということだから、受けとってない。その中に住んでない。

だから、私は「信仰」なんていう言葉は使いたくないんだ、すぐ観念化するから。「中に住め、宿れ」ということです。キリストという無限無量の内容の主体ですから、その中に入れば自由に決まっている。この絶対者にとらわれるということが本当の自由だ。だから、マルチン・ルターが「奴隷意志論」と言った。キリストは自分の意志に死んで、

「汝の御意（みこころ）を成させ給え」

と言って自分の意志を殺している。そうしたら、キリストは本当の自由だった。私たちでも、

「主よ、あなたの御意に従います」

と言って、キリストの中に入っていけば、自分はキリストの奴隷になるから――パウロが言っているでしょ、

「我はキリストの奴隷だ、囚人（めしうど）だ」

と言っている――キリストの囚人が一番素晴らしい自由人である。そういうことは、普通は分からないから困ってしまう。分からないわけですよ。

自然のものは自然界の法則にみんな従っているじゃないですか。だから、「あぁ、自然天然はいいなぁ」と言う。実は自然は物理法則が全部働いている世界だ。法則の世界です。自然法、キリストの霊法、みんなそうなんだ。キリストの霊法の中に入っていくと、それが自由です。自然の法則は、天然という。

そういう天然の法則と、キリストの神さまの法則。御意に従うこと。「従う」というと、なにか窮屈のようだけれども、そうじゃない。

「御意の中に入る」

と言えばいい。御意をわがこころとするわけですよ。一如の世界に入る。だから、キリストに任せられる。任せられるときに、「俺がやる」ではないですよ、御霊がなし給う。御霊というものを、何か妙な、対象的に意識したってダメです。一番中心になるんですからね。対象的じゃない。まん中で中心になってしまう。

「己を省みる」なんていうが、己を省みたってダメなんです。一番本当の世界はこの自性（じしょう）の世界なんです。第二の自性にならないとね。自分の性質が、自性が天性にならないと。あの「天性」という言葉は素晴らしい言葉だね。聖霊が入ってくると、これが本当の天性になってくる。もちろん、しょっちゅうそうだとは言いませんよ。けれども、それが中心で動けるようになるから、楽になる。こだわらなくなる。人にどう取り扱われようと、

「ああそうですか、結構でございます」

と。何も逆らう必要はひとつもない。もうひとつ上に出てしまっているから。

「18 **我等はみな面（かお）おいなくして鏡に映るごとく、主の栄光を見、栄光より栄**

光にすすみ、主たる御霊によりて主と同じ像に化するなり。」（コリント後3・18）

「主たる御霊によりて主と同じ像に化してしまう」

という。A君はA君らしくして主と同じ姿に化する。B君はB君らしくして。一人びとりの「らしさ」というものは決して消えない。みんな個性を持っている。しかも、その姿はみなキリストと一つになっている。それが

「同じ姿に化するなり」

ということですよ。みんな類型的になるということではない。人格はみな天下一品ですから。何も人をうらやむことも、妬むこともひとつもない。天下一品につくられている。こういうことは本当の聖霊の世界にこないと分からないんです、観念的には分かったような顔しているけれども。

●罪の奴隷

34 **イエス答え給う『まことに誠に汝らに告ぐ、すべて罪を犯す者は罪の奴隷なり。**

すべて罪を犯す者は罪の奴隷である。犯す者は罪に囚われているから奴隷である。欲心に囚われている。「罪」というのは自我ですよ。自我に囚われている。ところが、アブラハムは本当に父の中にいたような人である。

35 **奴隷はとこしえに家に居らず、子は永遠に居るなり。36 この故に子もし汝らに自由を得させば、汝ら実に自由とならん。我は汝らがアブラハムの裔なるを知る、**

血統的には裔であることを知っているけれども、

されど我が言なんじらの衷に留らぬ故に、我を殺さんと謀る。

私の言葉の中にいないものだから、殺そうと思っている。アブラハムと違うと思っているが、冗談じゃないと。

37 **我はわが父の許にて見しことを語り、**

アブラハム以上にですよ、父のもと、神さまのもとで見たことを語り、

汝らは又なんじらの父より聞きしこと行う』38 かれら答えて言う『われらの父はアブラハムなり』39 イエス言い給う『もしアブラハムの子ならば、アブラハムの業をなさん。40 然るに汝らは今、神より聴きたる真理を汝らに告ぐる者なる我を殺さんと謀る。アブラハムは斯ることを為さざりき。41 汝らは汝らの父の業を為すなり』

その「父」とはとんでもない父なんです。

かれら言う『われら淫行によりて生まれず、我らの父はただ一人、即ち神なり』

言うことは言うんだよ。

42 **イエス言いたもう『神もし汝らの父ならば、汝ら我を愛せん、われ神より出でて来ればなり、**

「神さまだ」なんて観念的な答案は結構なことを言うけれども、本当にそうならば、私の言うことも分かるし、私を愛するはずだ。というのは、私は神さまからやって来たんだと。

我は己より来るにあらず、神われを遣し給えり、

この「遣わす」という言葉がよく出てくるね。神のアンゲロス、使者なんだと。

43 **何故わが語ることを悟らぬか、是わが言をきくこと能わぬに因る。**44 **汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。彼は最初より人殺しなり、**

だから、お前たちは私を殺そうと思っているんだ。とんでもないはなしだと。完全にやられてしまったね、キリストに。

また真その中になき故に真に立たず、

この「真」は「アレテイヤ」ですから、キリストはヘブライ語で「エメツ」「アーメン」という字を使っているはずです。

「エメツがない。アーメンがない。真理がない」

と。「まこと」はこの「真」だけでもいい。さっき言った「誠」でもいい。

「誠」という名前もよく人が付けるね。そしたら、その子供が本当に福音的な誠になってもらいたいわけだ。本当のところに行かないで、いろんなことでもって適当にやっているんだが、どうして、そういうことで魂が満足できるだろうね。私はもうギリギリのところに来なければ、私の魂は満足しないんですよ、絶対的なところまで来ないと。

44 **汝らは己が父、悪魔より出でて己が父の慾を行わんことを望む。**

悪魔は君たちの父だと。悪魔というやつは我欲のかたまりだから、そして、非常に傲慢なんだ。「自分も神の如く」なんて思うやつが悪魔なんだ。

彼は最初より人殺しなり、

と。カインとアベルの、カインの中に入ってきたのがこの悪魔の心だよな。キリスト教国でも、宗教戦争なんてものは困ったものだ。その点では仏教の方が、いわゆる宗教戦争的なものはほとんどないものな。どうも血なまぐさいね。イラン、イラクの争いだってそうでしょ。アラブの宗教的な闘争だ。あれは狂信的なんだ。大きく人を入れて包んでしまうのはキリストの世界です。

彼は虚偽をかたる毎に己より語る、それは虚偽者にして虚偽の父なればなり。

人殺しの父で虚言者の父。

「汝、殺すなかれ。偽るなかれ」

という、あのモーセの十誡の流れに反するのは全部、サタンから来ている。

●神より出づる者

大量殺人は戦争です。お互いにそれから先へ先へともの凄い兵器をつくっているわけだ。極まるところを知らず。

「もうこんなことはやめて、本当に握手をしましょう」

というところに来ないから。本当に救いがたい。だから、どうしても黙示録になるんです。最後は羔の怒りになる。非常に逆説的な言葉だね、「羔の怒」なんていうのは。羔は十字架で赦していた。「恕（じょ）」という。この十字架の赦しを、罪の贖いを受けとらないと、とうとう最後に爆発するのがこの羔の怒なんです。

なんと、この福音というものが躓きになっているのかね。

「キリスト教か。まぁそれはちょっと待ってくれ」

なんてね。冗談じゃないよ。キリスト教自身が妙なキリスト教をやっているものだから。「来たりて見よ」ということです。

45 **然るに我は真（まこと）を告ぐるによりて、汝ら我を信ぜず、**

「私は本当のことを言っているのに、そいつを受けとらない」と。

46 **汝等のうち誰か我を罪ありとして責め得る。われ真を告ぐるに、我を信ぜぬは何故ぞ。**

この「真（まこと）」というのはみんな他のところで「真理」と訳している言葉です。この「真」という訳はいいね。口語訳では逆にみんな「真理」と訳してあるな。「真」でいい。「本当のことを言っているのに」という。「本当のこと」でもいい。「本まなことを言っているのに」と。

「私は本当のことを言っているのに、私を受けとらないとはどういうわけだ」

ということ。

47 **神より出づる者は神の言をきく、**

お前たちは神から出てないで、サタンから出ているからダメだと。

汝らの聴かぬは神より出でぬに因る』

その通りです。それは無理だよ、彼らに「神から出る」なんてね、キリストは。キリストだけが神から出ているんだから。けれども、「神から出る」ということは要するに、「人新たに生まれずば」ということになる。「神から出直しをしなければ」と。本当は、神から出ているんだよ、我々は本来は。幼児はみんな天使が守っているくらいだからね。知らない間に、天使がどこかへ行ってしまって、悪魔と切り替わってしまった。

●福音に生きていれば死んでも死なない

48 **ユダヤ人こたえて言う『なんじはサマリヤ人にて悪鬼に憑（つ）かれたる者なりと、我らが云えるは宜（うべ）ならずや』**

「サマリヤ人」というのは異端ということですよ、別に言うと。仲が悪いんですから。「ダイ

モニオン」「悪鬼」に憑かれている者だと我らが言うのは本当じゃないかと。

49**イエス答え給う『われは悪鬼に憑かれず、反って我が父を敬う、なんじらは我を軽んず。**50**我はおのれの栄光を求めず、之を求め、かつ審判し給う者あり、**

それは神であると。

51**誠にまことに汝らに告ぐ、人もし我が言を守らば、永遠に死を見ざるべし』**

キリストは理屈を言わないで、断定的なことをしょっちゅう言ってらっしゃる。ところが、これをちっとも受けとれない。「私の言を守らば」なんて言ったってね。

「わが言に生きるならば、もう永遠に死を見ない」

と。福音に生きていれば死んでも死なないというわけだ。

「そうですか」ではないですよ。本当にそうだとして進んで行かないと。集会ごとに、とにかく自分を突き破って進んで行かなければダメですよ。そんな（自分なんて）ものは問題じゃないと言って進んで行かなくては。

自分を省みることはないですよ。内村鑑三なんて、日に三度鑑みるなんて、あれはいい名前ではないんだ、本当は。あれは論語から来ているから仕方がない。お父さんが漢文の素養のある方だった。省みるのならキリストを省みたらいい。

私は悪鬼に憑かれてないぞ、とんでもないはなしだ。何を言うかと。まぁ面白いね、この問答は。そのまま書いてあるから。

52**ユダヤ人いう『今ぞ、なんじが悪鬼に憑かれたるを知る。アブラハムも預言者たちも死にたり、然るに汝は「人もし我が言を守らば、永遠に死を味わざるべし」と云う。**

とんでもないことを言うなぁと。

53**汝われらの父アブラハムよりも大なるか、**

アブラハムよりかお前は偉いのか。とんでもないぞ、お前はと。

彼は死に、預言者たちも死にたり。汝はおのれを誰とするか』

死なないなんて、えらいことを言うなと。

54**イエス答えたもう『我もし己に栄光を帰せば、我が栄光は空し。**

その通りですね。神さまから来る栄光を受けとるだけのはなしで、自分で栄光を帰してなんかいないと。

我に栄光を帰する者は我が父なり、

もう全部、お父さんのなさることで神さまのすることだ。こっちは完全に受け身だ。どうして一般のクリスチャンは自分の信仰というものをサムシングにしているでしょうか。

「私の信仰はまだまだだ」

なんて。何が「まだまだ」か。要らないんです、信仰なんか。

「何もありません、あなただけです」

と。それでいいじゃないですか。こういう乱暴なことを言う牧師さんも先生もいないだろうね。けれども、乱暴ではない。これは本当なんだ。それが本当の信仰だということです、もし逆説的に言うなら。絶信の信というのがそのことです。自分の信仰になんて絶しなさい。そうすると、賜りたる信が上からやってくる。これは自分の信ではない。だから、もの凄いんです。だから、力が働くんです。

即ち汝らが己の神と称うる者なり。

己の神と言っているけれども、本当はこっちが本当の己の神さまを持っているので、お前たちはその神を持たない。お前たちの神はサタンだと。こっちが何でもないと、神さまの栄光が現れて光るだけのはなしだと。お月さんみたいに太陽の光を受けてね。

55**然るに汝らは彼を知らず、我は彼を知る。**

神さまを知っていると。

もし彼を知らずと言わば、汝らの如く偽者（いつわりもの）たるべし。然れど我は彼を知り、且その御言を守る。

それに従っている。体現しているんだと。「守る」というのは、それにしっかりしがみついていること。御言という霊的な軌道にしょっちゅう乗っかっているということです。御言に従っている、体現しているぞと。

●アブラハムの生まれいでぬ前より

56**汝らの父アブラハムは、我が日を見んとて楽しみ且これを見て喜べり』**

と不思議なことが書いてあるね。これは創世記22章15節から、

「15**エホバの使者、再び天よりアブラハムを呼びて、16言いけるはエホバ諭（さと）したもう。我己を指して誓う汝この事を為し汝の子即ち汝の独子（ひとりご）を惜しまざりしに因りて、**

アブラハムはイサクをね、

17**我大いに汝を祝（めぐ）み又大いに汝の子孫を増して天の星の如く浜の沙（いさご）の如くならしむべし。汝の子孫はその敵の門を獲（とら）ん。18又汝の子孫によりて**

アブラハムの子孫によりて、

天下の民皆福祉（さいわい）を得べし。汝わが言に遵（したが）いたるによりてなりと。」（創世22・15～18）

これです。

「お前アブラハムは私の言に従ってイサクを献げようとした。それによってお前のその信仰は素晴らしかった。それによって天下の民はみな幸いを受けるぞ」

と。その時を待っていた。そのことが私において実現したということをキリストは言おう

としてらっしゃるわけです、「我が日」というのは。それで、天下の者は私を通して幸いを得るというわけだ。信仰の祖アブラハムが万民の福祉（さいわい）の基となった、それどころのさわぎではない。キリストによっては、驚くべき福音の元祖としてこれを受けとる人たちに本当の天的な幸いがやって来たと。そういうことです。

57**ユダヤ人いう『なんじ未だ五十歳にもならぬにアブラハムを見しか』**

何を言っているか、とんでもないたわごとを言っているじゃないかと。

58**イエス言い給う『まことに誠に汝らに告ぐ、アブラハムの生まれいでぬ前（さき）より我は在るなり』**

こういうことがはっきり言えるひとですから、おそろしいです。私はアブラハムよりも先にいたんだよと。永遠に神さまと一緒に天界にいて、イスラエルにエホバの神さまとしてしばしば現れてきたと。

59**爰に彼ら石をとりてイエスに擲（なげう）たんと為たるに、イエス隠れて宮を出で給えり。**

ちょっとまだ、私をやっつけるのは早いぞというわけで、キリストはスッとそこを逃れた。

ユダヤ人にとってはキリストは瀆神（とくしん）者なんです。神さまを瀆（けが）す者なんです。「自分は神の子だ」とか、「アブラハムよりも先にいたんだ」とかね。だから、悪鬼に憑かれてとんでもないことを言っていると、こう思うわけです。ところが、悪鬼に憑かれているのは彼らの方で、まぁこれだけ違うわけですよね。

●十字架と復活は離すことができない

パウロがローマ書4章で、

「1**然らば我らの先祖アブラハムは肉につきて何を得たりと言わんか。2アブラハム若し行為によりて義とせられたらんには誇るべき所あり、然れど神の前には有ることなし。3聖書に何と云えるか『アブラハム神を信ず、その信仰を義と認められたり』と。**」（ロマ4・1～3）

「アブラハム、エホバを信ず、エホバこれを彼の義となしたまえり」

という、有名な創世記15章6節の言葉でしょ。それでもってパウロは展開しているわけです。17節に不思議な言葉がある。

「17**彼はその信じたる所の神、すなわち死人を活かし、無きものを有るものの如く呼びたもう神の前にて我等すべての者の父たるなり。録して『われ汝を立てて多くの国人の父とせり』とあるが如し。**」（ロマ4・17）

「無きものを有るものとして

これは「ごとく」ではないんだ、

有るものとして呼びたもう神の前にて我等すべての者の父である」

と。独り子を賜いながら、それ献げろと。人身御供みたいなことだね。他の宗教でも昔はそういうことがあった。アブラハムは黙って従った。この黙って従ったのを見て、

「アブラハムはその行為が義とされた」

とヤコブが言った。パウロの方は、正に全的に受けとったから、

「信仰によって義とされた」

と言った。パウロの言っている「信仰によって」と、ヤコブが言っている「行為によって」とは同じことなんです。信即行の世界です。ヤコブが「行為によって」なんて言ったから、ルターが、

「とんでもない、これは間違っている。ヤコブ書は藁の書簡だ」

なんて悪口言ったけれども、それはヤコブの真義をルターはつかみそこなった。というのは、パウロと一緒に、

「律法の義ばかりを問題にしているからダメだ」

と言って、ルターは戦ったわけですから、ルターの気持は分かりますけれどもね。

「25**主は我らの罪のために付され、十字架にわたされ、我らの義とせられん為に甦えらせられ給えるなり。**」（ロマ４・25）

こういう言葉を見ても、十字架と復活は離すことができないわけです。これは二段構えではない。即しているんです。キリストが十字架にかけられっぱなしでどうにかなるか。罪の贖いをしたら必ず復活してくる。そして、聖霊を与える。これは三相一貫――三相と言おうが二相と言おうが同じこと――です。そういう意味において私が、

「十字架と聖霊は離すことができない」

と言っているのに、無教会ではただ「十字架、十字架」と言って、聖霊のことを非常に警戒している。そこに無教会の観念信仰の限界があった。使徒行伝を見てみろ、パウロを見てみろ、ヨハネを見てみろ、ペテロを見てみろと。いかに聖霊の働きの人であるか、聖霊の人であるか。なにも病が癒されるとか何とか、御利益を言っているではないですよ、私は。

●初めの愛

藤井先生や内村先生は、ある方向をちゃんと示していた。方向を示していただけで――そこを本当に歩いているのが我々ではないですか――それを方向だけで、あとはお終いになっているだけだ。足踏みしているんだ。ダメです。「進め！」と言っているんだ、キリストは。内村先生も藤井先生も天界から、「進め！」と言っている。まぁ今に時が審きますから、大丈夫です。藤井先生は『羔の婚姻』が未完成で終わったから――なにもあの先を書くんじゃない。全然別なものを私は書くんですけれども――先生に私は詩をもって応える。

今度のソネットにこう書いた。「初めの愛」という題で、私の十四行詩です。

「初めの愛」［独和対照］（ソネット、一九八四・六・二三）　天韻

「元始の愛は主と神から来ていた
幼いときに、だがそれは知らなかった。
第二の愛は母から流れて来た。
彼女は私を愛と光で育ててくれた。
第三の愛を兄に感じた。
少年のときに彼から学んだ際に。
本当に親しく教えてくれたです。
第四の愛は詩人から来た、
「詩人」というのは藤井先生のこと。
彼は日曜に深く聖書を説いた。
最後の愛が天降(あも)りした。
阿蘇山で祈っていたときに、
聖霊が私の中に突入した。
キリストの初めの愛はいつも
私の霊と体に力を賜うた、
私はその愛の中に絶えず帰入する。」（『エン・クリスト第19号、１９８４年７月）

そういう詩です。ちゃんとドイツ語でも韻を踏んでいるんです。

私は正直、兄貴の弔(とむら)い合戦です。兄貴は27歳で仆れるような男ではなかった。ロンドン行きが北京行きに、上役でもってひっくり返された。そのためにこれが運の尽きになった。兄の死は本当は非合理なんです、相対的に言って。だから、私は聖なる復讐をしなければならない。なにもその人に復讐するのではない。兄はシナで伝道しようと思って、そういう地図まで買っていた。

私は皆さんのような方々とキリスト直結の信仰に前進している。使徒たちの信仰が、どこが間違っているか。「無教会主義」なんて、なにが主義かと。とんでもない。イズムなんか越えた世界です。東西古今を本当に融合してしまう。もの凄いです、キリストは。そういうでっかい宇宙的なキリストをつかんでいないんだよな。だから、それはどうしても私は詩の形で表現しないではいられないわけです。

●信仰ではなく現実だ

まぁとにかく、ヨハネ伝のこういうところを読んでも、本当に凄いですよ、キリストというひとは。その中に入らないとどうにもならないということが分かるでしょ、キリストの中に入らなかったら。

「私の中に居れ、宿れ。信仰ではないぞ、現実だぞ」

と言っている。

私たちは空気に包まれ空気を吸っています。キリストという霊気を吸っていなければ。祈りの世界で本当にその世界に入ってごらん。もう確然とはっきりするから。そして、

「祈りは単なる言葉ではなかった」

と。躍動しちゃうから、自分で一人で祈っていたって。沈黙していたって、叫びたくなる。叫んだっていい。いっぺんそういうところを本当に突破してくださいよ。生易(なまやさ)しいことではないですからね。体裁ではないですから。パウロはキリストにあのようにひっくり返されたではないですか。パウロはパリサイの権化でね。ところが、

「お前のその熱心はとんでもない熱心だ。私の熱心をやるから、そんな熱心は棄てろ」

と。それで、

「自分の今までの律法の義なんてのは、これを塵芥(ちりあくた)の如く思う。キリストを得たるがゆえに」

と言っているではないですか。ああいうパウロのもの凄い全身的な白熱的な気合を受けとっていかなくては。ヨハネのまた本当に内住的な深い一如の世界を。パウロも、

「われキリストのうちに、キリストわがうちに」

と何回言ってるんですか、みんな「うちに、うちに」と。「信仰は、信仰は」なんて言ってやしない。もちろん、「信仰」という言葉は出てきますよ。けれども、それは躓きになる。キリストが大体わるいいよ――わるいと言っては悪いけれども――

「信仰、うすき者よ」

なんて仰るものだから、

「さぁ、あつくならなければいけない」

と思う。そういうあつさではないですよ。絶すると本当のあつさが出てくる。

あなた方は、魂の奥底から「然り」と言っているでしょうね。「そうですか」ではダメだよ。そうしたら、時間を超越して、凄い迫力が出てくるから。どんなに忙しかろうが、疲れを知らない人になる。

私は何歳に見えるかと聞くと、60代くらいだと言う。80だよと言うと、みんな目を丸くしてびっくりする。というのは、私はなにも自分が若いとか何とか言おうとしているのではない。「聖霊の力を見ろ」ということです。そうは言わないよ、言わないけれども、そういう意味なんです。いろんなことにでっくわして、行き詰まったり、いろんなことがあればあるほど、逆に力がこなければウソですよ。はっきり言っておきますけれども。それが御霊のありがたい世界なんです。使徒行伝を見たってそうでしょう。では、おしまい。